

卒業論文

大学新入生の孤独感と自己呈示の関連
ー携帯メールに着目してー

三重大学 教育学部 人間発達科学課程

57期 205713 西 陽平

平成21年1月20日提出

【要旨】	3
【問題と目的】	4
【方法】	8
対象	8
調査時期	8
手続き	8
質問紙の構成	8
【結果】	10
1. 各尺度の分析	10
1) UCLA 尺度の分析	10
2) 孤独の原因尺度の分析	10
3) 孤独の対処行動尺度の分析	11
4) 自己呈示尺度の分析	12
5) 孤独の対処行動後孤独感の算出	13
2. 各尺度間の相関分析	14
1) 孤独の原因の下位尺度間の関係	14
2) 孤独の対処行動の下位尺度間の関係	14
3. 仮説の検討	15
1)–1 居住体系と UCLA の検討	15
–2 UCLA と孤独の原因の検討	15
–3 居住体系と孤独の原因の検討	16
–4 UCLA と孤独の原因の検討	16
–5 孤独の原因各因子と孤独の対処行動の検討	17
2)–1 対処行動各因子と対処行動後孤独感の検討	19
–2 居住体系別の孤独の対処行動と対処行動後孤独感の検討	21
3)–1 自己呈示と対処行動の関係	22
–2 自己呈示と孤独の対処行動後孤独感の t 検定	22
【考察】	23
【総合考察】	27
【今後の課題】	28

【文献】	29
【謝辞】	30
【資料】	31

【要旨】

本研究は大学新生の孤独感と自己呈示の関係に注目して行われた。目的は2つある。1つは、入学時に感じる孤独感の違いが、その後の友人関係構築活動の中で行われる自己呈示に及ぼす影響をみることである。2つは、大学新生が新たな友人関係を構築する中で行う自己呈示が、その後の孤独感にどのような影響を与えるかをみることである。孤独の量測定尺度(UCLA)20項目、孤独の原因測定尺度17項目、孤独の対処行動尺度18項目、孤独の対処行動有効性評定尺度3項目、メール内自己呈示尺度18項目から構成された質問紙を、大学生230名に実施した。その結果明らかになったことは以下の通りである。(1)入学時の孤独感の規定要因は居住体系の違いではなく、孤独の原因得点の差である。(2)入学時に孤独感を強く感じている者は逃避対処、新規友人対処、既存友人関係の対処行動を多く行い、またその対処行動中の自己呈示量も高くなる。(3)対処行動を行えば行う程、また自己呈示量が増えれば増えるほどその後の孤独感は高くなる。

【問題と目的】

本研究は大学入学に伴う孤独感が新規友人とのコミュニケーション、とりわけ携帯メールでの自己呈示に与える影響を明らかにすることを目的としている。また、孤独感低減の対処法として新規友人とのメールを選択する際、自己呈示がその中で果たす役割と弊害に関しても明らかにすることで適切な自己呈示スタイルを見出し、大学新入生の大学適応への課題を軽減することを目的としている。

孤独感に関して

孤独感とは対人関係の中で感じる不快な感情であり、その研究は健全な社会的あり方を示唆し、親密さや友情など対人関係の研究に新たな視点と洞察を与えるものとして、心理学分野において数多くなされてきた。

本研究で取り扱う大学新入生の場合、大学入学に伴う生活環境の変化の有無が、入学時点での孤独感に大きな影響をもたらしていることが考えられる。例えば、見ず知らずの土地へ単身で引っ越してきた新入生と、自宅から通学し、入学時点で学内に友人を保有する新入生とでは、孤独感の原因帰属、孤独感の量に大きな違いがあることが考えられる。

これまで大学生の孤独感をとりあげた研究は自己意識や社会的スキルなどに関連付けて数多く行なわれてきたが、入学時の孤独感の違いがその後の友人関係形成に与える影響、また関係構築のための活動が孤独感に与える影響に関して行なった研究は少ない。本研究では、関係構築のための活動を新規友人との携帯メールの利用状況に焦点を当てて検証する。

孤独感と孤独の対処行動に関して

孤独の原因と、感情反応、およびその対処行動に関する研究を行った広沢(2002)は、孤独の原因認知によってその対処行動に違いが生まれることを明らかにした。

広沢(2002)の研究を大学新入生にあてはめて考えてみると、それぞれの学生が行う孤独の原因帰属の違いによって、その孤独の癒し方に差異が生まれることがいえる。例えば、環境の変化に孤独の原因を帰属している学生は新たな環境で社会的なつながりを形成する対処行動を行うであろうし、対人的な疎外感に孤独の原因を帰属している学生は親密な友人との接触を図ろうとすることが考えられる。この場合では、なぜ孤独なのかという帰属の違いによって、同じ対人接触という行動でも、接触を図る対象に違いが現れるのである。現代社会においては社会的ネットワークの発達により、時間的障害や距離的障害を携帯電話が軽減することにより、以前と比べ選択可能な対人接触が増加した。中でも携帯電話の普及は、対面でのコミュニケーションが難しい友人とでも、簡単に連絡がとれるようになったことなどから、孤独の対処行動の選択に大きな影響を与えていることが考えられる。

広沢(2002)が明らかにしたように、孤独の原因により対処行動に違いが現れるならば、孤独の原因は携帯電話の利用状況にも影響を与えることが考えられる。

携帯メールと自己呈示

現代社会においては社会的ネットワークの発達により、対面式コミュニケーションだけでなく、コンピューターを介したコミュニケーション(Computer-Mediated Communication 以下 CMC とする)も重要な関係構築のツールとして認識されている(五十嵐,2002)。CMC に関する研究は携帯電話などの普及に伴い発達心理学や社会心理学などをはじめとする様々な分野で行なわれてきたが、心理学研究においては一貫して非言語的の手がかりが少ないという特徴を根拠に研究がなされてきた。

杉谷(2007)は CMC の特徴として自己呈示が妨害されにくい点と認知的負荷量が低いという点を挙げ、携帯メールにおいては自分の望んだ通りの自己呈示が可能であり、また、自分の呈示した内容が相手に受け入れられやすいと推測を行なうという点からその他のコミュニケーションと比較して CMC が話しやすいと認知されることを明らかにした。

前述したように入学直後から孤独感の高い大学新生にとって、新たな関係構築を行わなければならない大学入学後の関係構築活動はとても負担の大きいものである。その中で、友人関係の構築を携帯メールを活用して行なった場合①相手に受け入れてもらえるような戦略的な自己呈示が可能である点②対面式コミュニケーションに比べ少ないコストで関係構築が期待できる点において、効率的に関係を築く役割を携帯メールが果たすと考えられ、その重要性は極めて高いものになることが分かっている(辻,2006)。

環境変化に伴う孤独感を抱いている大学新生の場合、自分の持つ孤独感を癒すためには早急な関係構築が最優先の課題になるため、新たな関係を構築中での自己呈示量も高くなることが考えられる。

自己呈示と孤独感

諸井(1987)は孤独感とセルフモニタリング尺度との関連について検討し、真の自己と異なる外見的な自己を意図的に作り出す傾向が孤独感の規定要因になるという見解を示している。加えて、集団の中で意図的に自分の印象を操作している状況では「本当の自分が理解されていない」と感じるにより、孤独感が生じているのではないかと考察している。

一方、斎藤(2003)は、戦略的な自己呈示は呈示者の目論見が表面化した際、呈示された側の呈示者への評価を著しく下げることが明らかになっている。

これまで自己呈示と孤独感を直接的に扱った研究は少なく、諸井(1987)の研究は自己呈示と孤独感に関する数少ない研究の興味深い知見の一つであるため、引き続き検討を行う必要性がある。

孤独の対処行動後の孤独感

前述したように、孤独感とは不快な感情であり、対処行動とはその不快な感情を軽減させるための行動である。

大学新生のメール行動とその後の孤独感に着目した五十嵐(2002)では、入学前の友人とのメール送信数とメール重要度が高まると孤独感が高くなること、入学後に知り合った友人とのメール送信数、メール重要度認知が高まると孤独感は低減することが明らかになっている。

入学前友人との携帯を通じた接触が孤独感を高めたのは、入学前の友人との携帯メールにより、「新たな環境で孤独である」という現状がより顕在化されたことが原因である。

また、携帯メールの大きな特徴である自己呈示の行いやすさを利用して、大学で知り合った友人と積極的な携帯メールによる接触を行った場合、自己呈示には孤独感を高める側面があることより、携帯メール内での自己呈示が原因で孤独感が増幅する可能性があることが分かる。

これまでを踏まえ、携帯メールの利便性や手軽さの陰には、ときには孤独感を増幅させるという側面があることが分かる。

携帯メールに着目し、孤独の対処行動とその後の孤独感の関係を明らかにすることで自己呈示と孤独感の関係を明らかにできるだろう。

問題と目的まとめ

大学生が入学時に抱く孤独感の違いはその後の対処行動に影響を与えることが予測される。また孤独の対処行動の中には新たな孤独感が生起する様々な可能性がある。例えば、対人接触の対象に入学前の友人を選択した場合(五十嵐, 2002)や、入学後の友人との対人接触中に自己呈示が多く行なわれていた場合などが考えられる。

孤独感と孤独の対処行動、携帯メールと自己呈示、自己呈示と孤独感の項で述べたように、携帯メールでのコミュニケーションには対人接触の大切なツールという機能的利便性ととも「自己呈示を行いやすい」という側面がある。一方で自己呈示には「孤独感の規定要因」という側面があるため、自己呈示と孤独感の両者に深い関係性があることが考えられる。

本研究では、孤独の原因帰属の種類が多岐にわたる点、それにより対処行動に様々な方法が取られることが予測される点、携帯メールによる孤独の対処行動が顕著にみられることが予測される点より入学直後の大学生に着目することで、自己呈示と孤独感の関連性を明らかにすることを目的としている。

本研究の仮説

本研究は、以下の2つのことを明らかにすることを目的としている。1つ目は、入学時の孤独感とその後の対処行動内での自己呈示に与える影響で、2つ目は対処行動内での自己呈示がその後の孤独感に与える影響である。

以下に本研究の仮説を挙げる。

1)–1 孤独感(UCLA)と孤独の原因の関係

単身で下宿をしている学生は自宅から通学する学生に比べ、大学入学に際して「環境の変化」が大きいことが考えられる。そのため下宿生は孤独の原因の中の「環境の変化」により孤独の原因を帰属し、また孤独感の量も自宅生に比べ高いことが考えられる。

1)–2 孤独の原因と孤独の対処行動の関係

大学新入生の場合、逃避的な対処を行うことは対人的な接触を行わずに孤独感を低減させることが可能なため、低コストで即時性の高い対処であるが、4年間という学生生活の期間を考えると長期的に有効な対処にならないことは明白である。

一方、対人接触を行うことで孤独感を低減させるためには、新しく暮らし始めた土地・環境の中で新たな人間関係を構築する必要がある。環境変化の大きい下宿生にとっては新たな人間関係の構築を行うことは、孤独感の高い現状を変えるためにも、充実した学生生活を送るためにも有効的な対処行動になるだろう。

以上のことを踏まえ、孤独の原因を環境の変化に多く帰属する学生は、孤独感を低減させるための対処行動で、新規友人との対人接触を頻繁に行うことが予想できる。

2) 孤独感の量・孤独の対処行動と自己呈示の関係

新規友人との対人接触を行い、新たな人間関係を構築することで孤独感を低減させようとした場合、携帯電話はそのための大切なツールになる。多くの人間関係を構築しようとしている者にとっては、少ないコストで関係構築が期待できる携帯電話の重要認知はそうでない者と比較すると、なおさらに高くなるだろう。

これらを言い換えると、孤独の対処行動において、新規友人との接触を選択した者にとって、相手に受け入れられ易いコミュニケーションが可能な携帯電話の利用は非常に有効的であり、またその中で真の自分とは異なる自己の呈示量は高くなることが考えられる。以上のことより、孤独の原因と携帯メール内自己呈示には関係があることが考えられる。

3) 孤独の対処行動・自己呈示と対処行動有効性評定(対処後孤独感)の関係

自己呈示量が高くなりすぎると、相手からの評価を著しく下げることと、対人関係構築の達成評価が下がることが先行研究で明らかにされている(安藤, 1994)。

本研究においても、自己呈示量が多くなりすぎると対人関係の構築に支障をきたし、それにより孤独感が低減されないことが予測できる。

また、対処行動において逃避的な対処を行った場合、一時的な孤独感は低減させることができても、根本的な孤独の原因は解決ができないため、孤独感が低減されないことを予測する。

【方法】

1. 対象者

大学生男女 230 名を対象として質問紙調査を実施した。このうち、質問紙に記入漏れや記入ミスがあったものを除き、有効回答者計 213 名(男性 95 名、女性 118 名)のデータを分析対象とした。対象者の平均年齢は 19.2 歳(SD=1.12)であった。また、対象者のうち 97 名が現在自宅で生活し、116 名が自宅外で生活をしていた。

2. 調査時期

2008 年 12 月に実施した。

3. 手続き

調査は講義時間中に質問紙を配布し、一斉に実施した。質問紙の回答に要した時間は 15 分程度であった。

4. 質問紙の構成

① 改訂版 UCLA 尺度

被験者には「大学に入学して間もないときの自分を思い出して回答してください」と前置きをしてから、回答させた。尺度の内容は Russell, Peplau, & Ferguson (1978) が既に標準化していた尺度を、Russell, Peplau, & Cutrona (1987) が再検討して構成しなおしたものである。この 20 項目からなる改訂版尺度は、原尺度でみられた反応バイアスを避けるために、表現内容がポジティブとネガティブの各 10 項目をこみにして無作為に配列されている。反応カテゴリーの形式は「しばしば感じる」「時々感じる」「めったに感じない」「全く感じない」の 4 件法で、孤独感が高いほど高得点になるように、1 点から 4 点に得点化されており、各被験者の特典は最高 80 点から最低 20 点の範囲内にある。なお、本研究では、信頼性、妥当性が十分に認められている、工藤・西川(1983)による邦訳版を使用した。

② 孤独の原因尺度

孤独の原因尺度は広沢(2001)が孤独の原因を捉えるために使用した 18 項目を無作為に配列しなおし使用した。被験者には「入学して間もないときの自分を思い出して回答してください」と述べた後、入学して間もないときに感じた寂しさの原因は以下の質問にどの程度当てはまっていますか」と問い、回答させた。反応カテゴリーの形式は「非常にそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全くそう思わない」の 4 件法で、入学して間もない頃に孤独に陥った原因と思えば思うほど高得点になるように、1 点から 4 点に得点化されている。

③ 孤独の対処行動尺度：

広沢(2001)が孤独に陥った際にどのような対処行動を行うかを捉えるために作成した 45 項目中、その際に得られた 6 因子の中からそれぞれ数個ずつ取り出し、現代風に改訂した 18 項目を使用した。被験者には「入学して間もないときに感じた寂しさを紛らわすために、以下のことをどの程度行いましたか」と問い、回答させた。反応カテゴリーの形式は「しばしば行った」「時々行った」「どちらとも言えない」「あまり行わなかった」「全く行わなかった」の 5 件法で孤独に陥った際、しばしば行った行動ほど高得点になるように、1 点から 5 点に得点化されている。

④ 孤独の対処行動有効性評定尺度

孤独の対処行動を行った後、孤独感がどのように変化していったかについて捉えるための質問項目 3 項目を独自で作成し、使用した。「孤独の対処行動で孤独を紛らわすことができたか」「孤独の対処行動を行ったことで孤独はぶり返さなかったか」「これまでの大学生活と孤独感の関係について」問い、被験者には「大学に入学して間もないときの自分を思い出して回答してください」と述べた後、回答させた。反応カテゴリーは「とても当てはまる」「当てはまる」「当てはまらない」「全く当てはまらない」の 4 件法で、孤独の対処行動の有効性評定が高くなればなるほど高得点になるように、1 点から 4 点に得点化されている。

⑤ 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度

小島・太田・菅原(2003)が印象管理の背景にある基本的な目的である‘承認’の 2 側面を測定するために作成した尺度を無作為に配列しなおし使用した。被験者には「入学して間もない頃の自分を思い出して回答してください」と前置きした後、「入学直後に友人とメールをした際、以下の質問をどれ程意識していたか回答してください」と問い、回答させた。反応カテゴリーは「当てはまる」「少し当てはまる」「どちらとも言えない」「あまり当てはまらない」「当てはまらない」の 5 件法で、各自己呈示欲求が高くなればなるほど高得点になるように 1 点から 5 点に得点化されている。

⑥ フェイスシート：学年、年齢、性別、現在の居住体系に関して下宿しているか自宅から学校に通っているかに関して尋ねる項目の 4 項目に回答させた。

【結果】

1. 各尺度の分析

1) 「UCLA 尺度」の分析

20 項目の合計得点を算出し、その合計点を UCLA 得点(Ave=50.5, SD=4.78, Max=62.0, Min=35.0)とした。

2) 「孤独の原因尺度」の分析

まず、平均値に標準偏差の値を足し算、または引き算し、尺度の上限値を超えた物、または下限値を下回った 2 項目は、データの分布に天井効果もしくはフロア効果が生じていると判断し、尺度から削除した。その後、広沢(2001)が使用した因子構造をもとに 15 項目を 5 因子に分けて尺度の信頼性分析を行った結果、3 因子から十分な信頼性が得られ、残りの 2 因子 3 項目は分析から除外することにした。

先行研究同様、第 1 因子($\alpha = .679$)は「積極的な対人接触の欠如」、第 2 因子($\alpha = .611$)は「対人的疎外感」、第 3 因子($\alpha = .603$)は「環境の変化」とし、以後の分析を進めることにした。

3) 「孤独の対処行動尺度」の分析

まず、平均値に標準偏差の値を足し算、または引き算し、尺度の上限値を超えた物、または下限値を下回った3項目は、データの分布に天井効果もしくはフロア効果が生じていると判断し、尺度から削除した。残りの15項目を主因子解のプロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減退状況と因子の解釈可能性から、5因子解が妥当であると判断した。そして、再度主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。それらから得られた5因子をもとに尺度の信頼性分析による内的整合性の検討を行った結果、4因子において十分な信頼性が示されたため、最終的に4因子、12項目で分析を進めることにした。最終的な因子パターンと因子間相関をTable1に示した。

第1因子は5項目で構成されており「楽しいことを考える」「一人になる」など、孤独から逃避する対処行動が高い負荷量を示していたため「逃避行動対処」と命名した。

第2因子は3項目で構成されており「新しい友人とメールをする」「新しい友人と遊ぶ」など、大学に入学してできた新規友人と関係を深めることで孤独への対処を図るものが高い負荷量をしめしていたため「新規友人対処」と命名した。

第3因子は2項目で構成されており、「TVを見る」「寝る」など、日常生活の中の身近な行動を行うことで孤独感の対処を図るものが高い負荷量をしめしていたため「身近な行動対処」と命名した。

第4因子は2項目で構成されており「昔からの友人にメールをする」「昔からの友人に会う」など、既存の友人と関係を深めることで孤独への対処を図るものが高い負荷量をしめしていたため「既存友人対処」と命名した。

項目内容	I	II	III	IV
じっと耐える	0.76	-0.04	0.12	-0.21
自分を見つめ直す	0.74	0.08	-0.15	0.16
一人になる	0.62	-0.35	0.24	0.09
仕事や勉強に打ち込む	0.56	0.33	-0.13	-0.09
楽しいことを考える	0.43	0.41	-0.02	0.14
新しくできた友人と遊ぶ	-0.03	0.81	0.11	-0.29
新しくできた友人とメールする	-0.06	0.68	0.34	-0.08
カラオケに行く	0.09	0.59	-0.10	0.07
TVを見る	-0.01	0.14	0.77	-0.01
寝る	0.09	0.02	0.72	0.07
昔からの友人に会う	0.01	-0.24	0.03	0.94
昔からの友人にメールする	-0.19	0.17	0.48	0.55
因子間相関				
I	-			
II		-	0.09	0.12
III			-	0.17
IV				-

4) 「自己呈示尺度」の分析

まず、先行研究を参考に 18 項目に対して因子数を 2 因子に設定し主因子法、プロマックス回転による因子分析を行い、その後、尺度ごとに尺度の信頼性分析を行った結果、2 因子 18 項目が分析対象として得られた。なお、累積寄与率は 54.841%だった。プロマックス回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table2 に示した。

先行研究通り第一因子($\alpha=.896$)は「賞賛獲得欲求」と命名し、第二因子($\alpha=.879$)は「拒否回避欲求」と命名した。

	1	2
自分を目立たせるために張り切りたい	0.81	0.11
できるだけ自分の存在をアピールしたい	0.80	0.19
まじ自分の魅力を印象づけたい	0.78	0.14
一目おかれるためにチャンスは物にしたい	0.76	0.23
自分の能力は積極的にアピールしたい	0.74	0.20
自分の長所をしっかりとってもらうために張り切る	0.73	0.27
つい人の目を引きたくなる	0.72	0.17
過去の経験を伝えることは自分をアピールするチャン	0.69	0.31
有名人になりたいと思うことがある	0.63	0.28
関係がまずくなるような議論は避けたい	0.09	0.77
相手に変な目で見られないか心配だ	0.23	0.75
自分の考えが否定されないか心配だ	0.23	0.73
自分の意見が批判されるとうろたえてしまう	0.22	0.72
自分が孤立していないか心配になる	0.33	0.72
相手の反感を買わないように注意する	0.15	0.71
相手から敵視されないような人間関係作りを心がける	0.23	0.68
不愉快な表現をされると相手の機嫌をとる	0.33	0.67
場違いな発言をしないように心がけている	0.03	0.64
因子間相関	I	II
I	—	0.28
II		—

5) 孤独の対処行動後孤独感の算出

孤独の対処行動後有効性評定の得点をもとに、孤独の対処行動後の孤独感を疑似的に算出した($n=213$, $Ave=127.40$, $SD=41.69$)。

方法は、孤独の対処行動有効性評定の得点を 4 段階評価を逆転させ、UCLA の得点との積をもとめることで、UCLA の得点が高く、なお且つ孤独の対処行動有効性評定が低い者の得点が高得点になるように算出した。

例えば、UCLA の得点が 10 点で、孤独の対処行動がどれほど効果的に孤独を軽減させたかについて評定する孤独の対処行動有効性評定が 3 点だった場合、 10×2 で対処行動後孤独感は 20 になる。

また、上記の方法で求めた変数の妥当性を検討するために UCLA の得点と孤独の対処行動有効性評定得点の標準化を行い、2 つの標準化得点の和を求めたもの($n=213$, $Ave=-.005$, $SD=1.48$)も孤独の対処行動後孤独感の分析の対象にしたところ、多少の傾向差はあったものの、2 つの方法で求めた変数が類似していたため、その後の検定は UCLA と孤独の対処行動有効性評定の逆転得点の積で求めた変数を対処後孤独感と命名し分析に用いた。

2. 各尺度間の相関分析

1) 「孤独の原因」の下位尺度間の関係

孤独の原因尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「対人接触の欠如」下位尺度得点(Ave= 2.25, SD 0.64, Max=4.00, Min=1.00)、「対人的疎外感」下位尺度得点(Ave=2.09, SD= 0.56, Max=3.75, Min=1.00)「環境の変化」下位尺度得点(Ave= 2.19, SD= 0.59, Max=3.75, Min=1.00)とした。

孤独の原因の下位尺度間相関を Table3 に示した。3つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

	対人接触の欠如	対人的疎外感	環境の変化	平均	SD	α 係数
対人接触の欠如	—	0.55**	0.45**	2.25	0.64	0.67
対人的疎外感		—	0.56**	2.09	0.56	0.61
環境の変化			—	2.19	0.59	0.6

**p<.01

2) 「孤独の対処行動」の下位尺度間の関係

孤独の対処行動尺度の4つの下位尺度に相当する項目の平均値を算出し、「逃避行動対処」下位尺度得点(平均 3.19, SD 0.81)、「新規友人対処」下位尺度得点(平均 3.05, SD 0.93)、「既存友人対処」下位尺度得点(平均 3.43, SD 1.16)、「身近な行動対処」下位尺度得点(平均 4.04, SD 0.93)とした。

孤独の対処行動の下位尺度間相関を Table4 に示した。4つの下位尺度は互いに有意な正の相関を示した。

	逃避対処	新規友人対処	既存友人対処	身近な行動対処	平均	SD	α
逃避対処	—	0.21**	0.14*	0.23**	3.19	0.81	0.65
新規友人対処		—	0.30**	0.31**	3.05	0.93	0.54
既存友人対処			—	0.42**	3.43	1.16	0.6
身近な行動対処				—	4.04	0.93	0.6

**p<.01 *p<.05

3. 仮説の検討

1)-1 居住体系と UCLA の検討

居住体系の違いによって、孤独感に差異があるかを検討するために UCLA 得点について t 検定を行ったものを Table5 に示した。その結果、自宅生と下宿生の孤独感の得点に有意な差は見出せなかった($t(211)=0.28$, n.s.)。

	下宿生		自宅生		t値
	平均	SD	平均	SD	
UCLA	50.57	4.93	50.39	4.62	0.78

1)-2 UCLA と孤独の原因の検討

孤独感の量を測定する UCLA と孤独の原因尺度の関係を住居体系別の相関を Table6 に示した。

下宿生では、UCLA が対人接触の欠如($r = .297$, $p < .01$)と対人的疎外感($r = .226$, $p < .05$)環境の変化($r = .214$, $p < .05$)全てと正の相関を示したのに対して、自宅生では UCLA と対人接触の欠如($r = .268$, $p < .01$)と対人的疎外感($r = .290$, $p < .01$)のみが正の相関を示し、環境の変化と有意な相関を示さなかった。

	all_UCLA	対人接触の欠如	対人的疎外感	環境の変化
all_UCLA	-	0.30**	0.23*	0.21*
対人接触の欠如	0.27**	-	0.60**	0.48**
対人的疎外感	0.29**	0.48**	-	0.55**
環境の変化	0.02	0.44**	0.57**	-

** p<.01 * p<.05 右上=下宿 左下=自

1)–3 居住体系と孤独の原因の検討

居住体系と孤独の原因の差の検討を行うために、孤独の原因下位尺度得点について t 検定を行ったものを Table7 に示した。

その結果、環境の変化因子に関しては下宿生が自宅生に比べ有意に高い得点をつけていた($t(211)=.401, p<.001$)。

	下宿生		自宅生		t値
	平均	SD	平均	SD	
対人接触の欠如	2.27	0.67	2.24	0.61	0.32
対人的疎外感	2.15	0.61	2.04	0.51	1.42
環境の変化	2.24	0.59	2.02	0.55	3.93**

** p<.01 *p<.05

1)–4 UCLA と孤独の原因の検討

UCLA の高低差と孤独の原因を検討するために、孤独の原因下位尺度得点について t 検定を行ったものを Table8 に示した。

その結果、UCLA 高群は低群より、対人接触の欠如下位尺度($t(211)=-4.31, p<.01$)、対人的疎外感($t(211)=-3.89, p<.01$)、環境の変化($t(211)=-1.38, p<.05$)の全ての因子について、有意に高い得点をつけていた。

	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対人接触の欠如	2.44	0.62	2.07	0.61	-4.21**
対人的疎外感	2.24	0.58	1.95	0.52	-3.89**
環境の変化	2.25	0.62	2.14	0.56	-1.39*

** p<.01 *p<.05

1)-5 孤独の原因の各因子と孤独の対処行動の検討

孤独の原因の各因子ごとの差が孤独の対処行動に与える影響を検討するために、孤独の原因の3因子と孤独の対処行動得点についてt検定を行った結果をTable9~Table12に示した。

まず、環境の変化得点差の検討を行うために、孤独の対処行動下位尺度得点についてt検定を行ったものをTable9に示した。その結果、逃避行動下位尺度得点(t(211)=-3.62, p<.01)と身近な行動対処下位尺度得点(t(211)=-2.18, p<.01)に関しては低群よりも高群のほうが有意に高い得点を示していた。新規友人下位尺度得点(t(211)=-0.13, n.s.)と既存友人対処(t(211)=-0.79, n.s.)に関しては、環境の変化の得点の差は有意ではなかった。

	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
逃避行動	3.37	0.65	2.96	0.94	-3.62**
新規友人対処	3.06	0.9	3.04	0.98	-0.13
既存友人対処	3.49	1.06	3.36	1.28	-0.79
身近な行動対処	4.17	0.82	3.89	1.04	-2.18**

** p<.01 * p<.05

次に、対人接触の欠如得点差の検討を行うために、孤独の対処行動下位尺度得点についてt検定を行ったものをTable10に示した。その結果、逃避行動下位尺度得点(t(211)=-2.15, p<.01)と新規友人対処下位尺度得点(t(211)=2.39, p<.01)と既存友人対処(t(211)=1.83, p<.05)に関しては低群よりも高群のほうが有意に高い得点を示していた。身近な行動対処(t(211)=0.58, n.s.)に関しては、対人接触の欠如の得点差は有意ではなかった。

	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
逃避行動	3.31	0.68	3.05	0.94	-2.15**
新規友人対処	2.91	0.86	3.22	1.01	2.39**
既存友人対処	3.31	1.13	3.61	1.19	1.83*
身近な行動対処	4.01	0.90	4.09	0.97	0.58

** p<.01 * p<.05

最後に、対人的疎外感の得点差の検討を行うために、孤独の対処行動下位尺度得点について t 検定を行ったものを Table11 に示した。その結果、逃避行動下位尺度得点 (t(211)=-3.85, p<.001)のみ低群よりも高群のほうが有意に高い得点を示していた。新規友人対処(t(211)=-.042, n.s.)と既存友人対処(t(211)=-.010, n.s.)と身近な行動対処 (t(211)=0.58, n.s.)に関しては、対人接触の欠如の得点差は有意ではなかった。

	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
逃避行動	3.42	0.69	3.01	0.86	-3.85***
新規友人対処	3.09	0.92	3.02	0.95	-0.42
既存友人対処	3.44	1.12	3.43	1.21	-0.10
身近な行動対処	4.10	0.88	4.10	0.97	-0.77

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

2)–1 対処行動各因子と対処行動後孤独感の検討

孤独の対処行動の各因子ごとの差が対処後孤独感に与える影響を検討するために、孤独の対処行動の4因子と孤独の対処後孤独感についてt検定を行った結果をTable12～Table15に示した。

まず、逃避行動対処の得点差の検討を行うために、孤独の対処行動後孤独感得点についてt検定を行ったものをTable12に示した。その結果、逃避行動対処高群の方が低群よりも有意に対処後孤独感得点が高い得点を示していた。(t(211)=-2.94, p<.01)

Table12 逃避行動高低群別の平均とSDおよびt値					
	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対処後孤独感	134.3	40.1	117.6	42.17	-2.94**
** p<.01 *p<.05					

次に、新規友人対処の得点差の検討を行うために、孤独の対処行動後孤独感得点についてt検定を行ったものをTable13に示した。その結果、新規友人対処高群の方が低群よりも有意に対処後孤独感得点が高い得点を示していた。(t(211)=-2.10, p<.05)

Table13 新規友人対処高低群別の平均とSDおよびt値					
	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対処後孤独感	133.8	43.38	121.9	39.54	-2.10*
** p<.01 *p<.05					

次に、既存友人対処の得点差の検討を行うために、孤独の対処行動後孤独感得点についてt検定を行ったものをTable14に示した。その結果、既存友人対処高群の方が低群よりも有意に対処後孤独感得点が高い得点を示していた。(t(211)=-1.97, p<.05)

Table14 既存友人対処高低群別の平均とSDおよびt値					
	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対処後孤独感	132.1	34.53	119.6	50.53	-1.97*
** p<.01 *p<.05					

最後に、身近な行動対処の得点差の検討を行うために、孤独の対処行動後孤独感得点について t 検定を行ったものを Table15 に示した。その結果、身近な行動対処高群の方が低群の間に有意な対処後孤独感得点の差は無かった。(t(211)=-1.56, n.s.)

Table15 身近な行動対処高低群別の平均とSDおよびt値					
	高群		低群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対処後孤独感	132.1	42.18	123.2	40.97	-1.56

** p<.01 *p<.05

2) - 2 居住体系別の孤独の対処行動と対処行動後孤独感の検討

居住体系別の孤独の対処行動と対処後の孤独感について検討するために、平均値を境に対処後孤独感を高低群に分け、対処行動の各因子と対処後孤独感の群別の t 検定を行った結果を Table16～Table17 に示した。

下宿生の孤独感高低群と孤独の対処行動各因子の t 検定を行った結果、既存友人対処因子($t(95)=-3.18, p<.01$)と身近な友人対処($t(95)=-2.12, p<.05$)に関しては対処後孤独感高群の方が低群より有意に高い数値を示している。逃避行動対処($t(95)=-.85, n.s.$)と新規友人対処($t(95)=-1.56, n.s.$)の間に有意な差は示されなかった。

	低群		高群		t値
	平均	SD	平均	SD	
逃避行動対処	3.16	0.97	3.30	0.74	-.853
新規友人対処	2.99	1.00	3.26	0.86	-1.56
既存友人対処	2.94	1.12	3.63	1.10	-3.20**
身近な行動対	3.92	1.07	4.29	0.77	-2.11*

** p<.01 *p<.05

次に、自宅生の下宿生の孤独感高低群と孤独の対処行動各因子の t 検定を行った結果を Table17 に示した。対処後孤独感の高低群において、逃避行動対処($t(95)=1.74, n.s.$)、新規友人対処($t(95)=1.23, n.s.$)、既存友人対処($t(95)=1.22$)、身近な友人対処($t(95)=1.57, n.s.$)のいずれの因子においても有意な差は示されなかった。

	低群		高群		t値
	平均	SD	平均	SD	
逃避行動対処	3.02	0.84	3.29	0.65	-1.74
新規友人対処	2.85	0.91	3.09	0.94	1.23
既存友人対処	3.48	1.10	3.75	1.08	1.22
身近な行動対	3.84	0.99	4.13	0.82	1.57

** p<.01 *p<.05

」

3)-1 自己呈示と孤独の対処行動の関係

居住体系別に孤独の対処行動の各因子と自己呈示尺度の相関関係を測ったものを Table18 に示した。

下宿生の場合、賞賛獲得欲求は逃避行動($r = .307, p < .001$)と新規友人対処($r = .329, p < .001$)がそれぞれ正の相関を示し、拒否回避欲求は逃避行動($r = .357, p < .001$)と身近な行動対処($r = .372, p < .001$)がそれぞれ正の相関を示した。

自宅生の場合、賞賛獲得欲求は逃避行動($r = .373, p < .001$)と新規友人対処($r = .289, p < .001$)と正の相関を示し、拒否回避欲求は逃避対処($r = .278, p < .001$)と正の相関を示した。

	逃避	新規友人対処	既存友人対処	身近な行動対処	賞賛獲得	拒否回避
逃避行動対処	-	0.17	0.15	0.24**	0.31**	0.36**
新規友人対処	0.26**	-	0.27**	0.28**	0.33**	0.23**
既存友人対処	0.15	0.36**	-	0.45**	0.14	0.18
身近な友人対処	0.21*	0.34**	0.40**	-	0.15	0.37**
賞賛獲得	0.37**	0.29**	0.13	0.16	-	0.34**
拒否回避	0.28**	0.12	0.01	0.11	0.25**	-

** p<.01 *p<.05 右上=下宿 左下=自宅

3)-2 自己呈示と孤独の対処行動後孤独感の t 検定

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の和から自己呈示欲求を求め、平均を境に低群(n=106)と高群(n=107)に分けた。

その後、自己呈示の高群・低群の孤独の対処行動後孤独感の差を検討するために、孤独の対処行動後孤独感得点について t 検定を行った結果を Table19 に示した。その結果、孤独の対処行動後孤独感について自己呈示低群よりも自己呈示高群のほうが有意に高い得点を示していた($t(211) = -2.39, p < .01$)。

	低群		高群		t値
	平均	SD	平均	SD	
対処行動後孤独感	120.59	42.7	134.14	39.7	-2.98**

** p<.01

【考察】

本研究の目的は大学新入生の入学直後の孤独感がその後の対人接触中の自己呈示に及ぼす影響を明らかにし、また、その自己呈示がその後の孤独感に与える影響を明らかにすることである。仮説としては、

- ①居住体系の違いによって孤独の原因の帰属に違いがあり、孤独感の量が高いだろう
- ②孤独の原因によってその孤独の対処行動に差異が生まれるだろう
- ③孤独の対処行動中に自己呈示を行いすぎると新規友人との良好な関係構築に支障をきたすため孤独感が軽減されないだろう

の3つである。

以下から質問紙調査の分析結果をもとに仮説の検証を行っていく。

1)–1 居住体系と孤独の原因

Table5 より居住体系と UCLA の t 検定を行った結果、居住体系による UCLA の平均に有意差は見出されなかった。次に、居住体系別に孤独の原因と UCLA の相関関係を検定した結果、下宿生と自宅生どちらも UCLA と孤独の原因の「対人接触の欠如」因子、「対人的疎外感」因子と正の相関がみられた。しかし、UCLA と「環境の変化」因子は下宿生では正の相関がみられたが、自宅生では相関関係が見出すことができなかった(Table4)。

仮説は自宅生に比べ下宿生は、大学入学に際し生まれ育った環境や家族、身近な友人たちとの別れを経験し、環境が大きく変化しているため孤独感の量が高く、また孤独の原因を環境の変化に帰属するだろうというものだった。

孤独の原因帰属に関しては下宿生のみが環境の変化因子と正の相関があったことから想定していた結果が得られたが、居住体系の違いによって UCLA に差異が生まれるという仮説は支持されなかったため、仮説 1 は部分的に支持された結果になった。

予想と反して居住体系が孤独の量を規定しなかった原因として、2つの理由が考えられる。

まず1つ目は環境の変化の有無に関わらず、大学新入生の大半は変化の量に差はあれ、多少なりとも大学入学に際し環境の変化を経験しており、自宅生も下宿生と同じ程度に孤独を感じている可能性があることである。調査前の段階では、環境の変化の量こそが大学新入生の感じる孤独感の根本的な原因になっており、環境変化の量が大きい下宿生が孤独を強く感じていると考えていたが、大学新入生の孤独感は環境の変化よりも、対人的疎外感や対人接触の欠如によって規定されている可能性があることが今回の結果から分かる。また、環境の変化に伴って対人接触が欠如し、環境の変化よりも対人接触の欠如に孤独の原因を多く帰属したことも考えられる原因の一つである。

2つ目に考えられる原因としては、質問紙調査を行う大学に入学する被験者の特色によって、仮説で想定していたものと異なる結果が得られたことである。質問紙調査を

行った大学は地域と強く密着しており、そのため地元の高校出身者の割合がとても高い。今回の調査では自宅生よりも下宿生の方が人数的に多かったが、下宿する学生も県内の高校出身者が多く、「入学時点で高校時代の友人が身近に誰もいない」ことを前提にしていた下宿生像と質問紙調査で得られた下宿生のデータが違っていたことが UCLA と居住体系が無相関だった理由として考えられる 1 つである。

1)–2 孤独の原因と孤独の対処行動

Table7 より居住体系別の孤独の原因得点の差を検討した結果、環境の変化因子に関してのみ、自宅生と下宿生の有意な差が示された。また、孤独の原因の各因子ごとの差が孤独の対処行動に与える影響を検討するために孤独の原因の 3 因子と孤独の対処行動について t 検定を行った結果、環境の変化因子得点高群は、逃避行動対処と身近な行動対処に関して、低群に比べ有意に高い得点を示していた(Table9)。次に、対人接触の欠如因子に関しても同検定を行った結果、逃避行動対処では高群が低群より有意に高い得点を示し、新規友人対処に関しては低群の得点が高群より有意に高いことが示された(Table10)。最後に対人的疎外感因子に関して同検定を行った結果、逃避行動対処のみ高群の得点が高群に比べ有意に高いことが示された(Table11)。

孤独の原因と孤独の対処行動の仮説としては、孤独の原因を環境の変化に帰属した学生は、新規友人と新たな関係を構築することで孤独感の低減を図るだろうというものだった。

しかし環境の変化因子に高い得点を帰属した者は、逃避行動対処を多く行っており、ここでの仮説は支持されなかった。

今回の結果は、孤独の原因を 3 つのどの因子に帰属しても対処行動は逃避行動対処と強く結び付くというものだった。逃避行動対処とは「仕事や勉強に打ち込む」や「一人になる」など、孤独を感じた際にその時の孤独感を一時的にやり過ごすための対処行動であると言える。大学に入学し、孤独感を感じつつも積極的に新規友人と接触することを選ばずに、逃避行動や身近な行動で孤独の対処行動を行うことは受動的な関係構築方法を選択していることを意味しているといえるだろう。

今後の考察では、それぞれの孤独の対処行動が対処行動後の孤独感にどのような影響を与えるかに関して考察を行っていく。

2) 孤独の対処行動と対処後孤独感の関係

孤独の対処行動と対処行動後孤独感の関係を分析した結果、すべての因子で対処行動高群は低群より対処行動後孤独感の平均値が有意に高くなっていることが分かった(Table12, Table13, Table14, Table15)。また、居住体系別の分析の結果、自宅生は孤独の対処行動の各下位尺度得点と対処行動後孤独感に有意な差はなかったが、下宿生では既存友人対処と身近な行動対処の高群は低群に比べ有意に対処行動後孤独感が高くなった(Table16, Table17)。

孤独の対処行動と対処後孤独感の仮説としては、下宿生で逃避行動対処、既存友人対処を選択した者は対処後の孤独感が高くなる、自宅生では逃避行動対処、身近な行動対処を行った者は孤独感が高くなるというものであった。

仮説で挙げた通り、下宿生が既存友人対処を行った結果、対処行動後孤独感が高くなっている。これは五十嵐(2002)が明らかにしたように、入学前の友人とのメールコミュニケーションの重要性認知が対面コミュニケーションが困難な状況で上昇してしまうと孤独感が高くなるという先行研究の結果を支持する結果になった。大きな環境の変化を経験した下宿生にとって、新しい環境で出会った友人と新たな関係を構築することが孤独感を癒す意味では早急な課題になることが考えられる。新たな関係構築がまだ十分に行われていない状況にも関わらず、孤独感から逃避するために対面でのコミュニケーションを行うことが困難な距離にいる友人と連絡を交わしてしまうと、孤独な現状が顕在化してしまうため孤独感が増幅してしまうというメカニズムが既存友人対処には潜んでいるのである。

Peplau & Perlman(1982)は、孤独感を「人間の社会的相互作用における願望レベルと達成レベルの間の食い違いから起こる不快な経験」と定義づけしている。つまり、社会的なつながりに対する主観的な願望レベルと達成レベルのズレにより孤独感は生じられるのである。

逃避行動対処は孤独なそのときをやり過ごすための方法であり、大学新入生の場合、根本的な孤独の原因を対処できる方略ではないことが考えられる。そのため、対処行動が終わるとまた孤独がぶり返してしまう可能性が高い。

例えば、孤独の原因を対人接触の欠如に帰属し、その孤独を対処するために逃避行動を行ってしまうと、孤独の根本的な問題である対人接触が欠如している状況がさらに深刻になってしまう。

孤独の原因と対処行動の関係をみると、対人接触の欠如因子と逃避行動が強い相関をしめしたことより、上記のような負のスパイラルが生まれることは十分に考えられる。

新規友人対処で孤独感の低減を図った場合、社会的つながりの達成レベルが上昇し、その後孤独感が再びぶり返すリスクも低くなることが考えられるため孤独感の高い大学新入生にとって有効的に孤独感を癒すことができることが考えられる。一方、既存友人対処、逃避行動対処、身近な行動対処は達成レベルではなく願望レベルを操作することで、孤独感を低減させる方法であると考えられることができる。

次に、各対処行動得点の高群が対処後の孤独感が一様に高くなった結果に関してだが、新規友人対処に関してはまだ分析を深めていく必要がある。なぜなら、大学入学に際し、環境の変化を多少なりとも経験した新入生にとって、孤独の原因を克服し孤独感を軽減するためには新規友人に触れ合うことが最も効果的な孤独の対処になるはずである。しかし、今回の調査では新規友人対処も対処高群が低群に比べ対処後孤独感が高くなった。この理由を説明するためには今回の研究の主軸である自己呈示の

概念を加味して考える必要性があることが考えられるため、以下の考察において自己呈示と対処後の孤独感の関係を検討する。

3) 自己呈示と対処行動後孤独感

自己呈示尺度と対処行動後の孤独感の関係を分析した結果、下宿生は自己呈示と対処後孤独感の間に有意な相関関係はなく、自宅生は賞賛獲得欲求、拒否回避欲求ともに対処行動後孤独感と正の相関が示された(Table18)。また、下宿生と自宅生を区分せずに全体のデータで自己呈示高低群の対処後孤独感の平均値を比較した結果、自己呈示高群の対処後孤独感の平均値が低群の平均値に比べ有意に高いという結果が得られた(Table19)。

自己呈示と対処後の孤独感の仮説としては自己呈示を多く行ったものは、たとえ新規友人対処を行っていても対処後の孤独感が高くなるというものだった。また、下宿生に関しては対処行動で新規友人対処を多く行っていることが考えられ、その結果、自己呈示を多く行いすぎると孤独感が高くなるという結果が顕著に示されることを予想していた。

分析を行う中で下宿生に自己呈示と対処後孤独感に有意な差が示されなかったのは、自宅生の多くは対処行動において逃避行動に高い得点をつけており、新規友人対処中の自己呈示得点に偏りが出てしまったことが理由として考えられる。一方で全体のデータで自己呈示と対処後孤独感の検証を行った結果、自己呈示高群が低群に比べ対処後の孤独感が高くなったことが分かる。

自己呈示が孤独感を高めるための十分条件と言えるだけの検討は本研究においてはできないが、自己呈示高群が低群と比較し対処後の孤独感が有意に高い結果をみれば、孤独感を規定する要因の一つに自己呈示が含まれることは十分に考えられるだろう。

状況に応じて相手により受け入れてもらえるような人間を演じたり、自分の理想の人間像を相手に呈示することは、人間ならば誰しも行いがちであり、呈示する相手がまだ自分のことを何一つ知らない人間ならばなおさらのことであろう。人間が社会的な動物である以上、自己呈示も社会での人間関係を円滑に進めるための社会的スキルの大切な要素である。しかし、出会ったばかりの友人に自己呈示を過剰に行いすぎると、後々化けの皮が剥がれてしまうことで相手からの評価を下げたり、背伸びした状態で友人関係を進めることに疲れてしまったりと、良好な人間関係を築くことの妨げになるリスクが自己呈示にはあり、今回の研究は自己呈示のリスクから孤独感が生じるというメカニズムを示唆していると言える。

【総合考察】

大学新入生の自己呈示と孤独感の関連を明らかにすることを目的にして今回の調査は行われた。

大学新入生の孤独感の規定要因は自宅生か下宿生かの居住体系の違いではなく、その時の孤独の原因の帰属得点の高低差だった。つまり、自己の孤独に関してどれほど意識するかが孤独感の規定する強い要因になっていた。

また、孤独の原因の帰属の違いによって孤独の対処行動に差異が表れるかに関して検討した結果、今回の調査では孤独の原因をのどの因子に帰属しても、逃避的な対処を多く行っていることが分かった。続いて行った対処行動と対処行動後の孤独感に関する検討により、逃避対処、新規友人対処、既存友人対処を多く行えば行う程その後の孤独感は高くなることが明らかになった。

孤独の対処行動をどれほど行うかは入学時の孤独感が規定していることが分かり、入学時の孤独感が高い者はその後対処行動を多く行う。また、その結果対処後の孤独感がより増幅するという孤独感と孤独の対処行動の関連性が明らかになった。

また、新規友人と接する際、自己呈示を多く行うとその後の孤独感が高くなることも分かったことにより、入学時の孤独感を癒すための最良の方法として考えられる、大学で出会った友人との対人接触も、自己呈示を行いすぎると逆効果であることが分かった。

大学新入生といえば、高校を卒業し、サークル活動やアルバイト経験など、これまでとは異なるライフステージが訪れることへの期待や不安でいっぱいである。単身で一人暮らしを始める学生ならば、異なる環境への順応という課題もあり、そこには孤独感や対人的不安なども当然付きまとうであろう。そういう学生の多くが、理想の大学生活へ高い目標を設定し、友人関係の幅を広げる作業を急ぎがちになるのではないだろうか。安藤(1994)は自身の著書の中で自己呈示量が増加しやすい場面として、「高い価値をおいてある目標を達成しようとするとき」「目標達成への関連性が強いとき」の2つを挙げている。つまり大学新入生に限らず、人間は新たな環境で何かをスタートする際、目標や期待を高く見積もれば見積もる程、自己呈示を行いがちなのである。そのような場面に出くわし、新たな友人と関係を構築する際には過剰な自己呈示は行わないように意識し対人接触を行っていかねばならないのかもしれない。

実りある学生生活のスタートの段階で、ありのままの自分を通して友人関係を作り上げることを忘れず、また、よりよい人間関係を築くための補佐的役割を自己呈示が担うことを忘れなければ、多くの学生がある程度同じ環境で大学生活をスタートする以上、良好な人間関係の構築は期待できるだろう。

【今後の課題】

今回の研究を行う中で、幾つかの問題を感じたため、今後の研究の課題点として次回からの研究に役立てていきたいと思う。

まず、孤独感の測定に関して感じた課題を挙げる。今回の研究の質問紙調査時期は12月であり、大学入学からすでに半年が経過しており、被験者には過去の孤独感を回想して回答させたため、純粋なデータが取れなかった可能性が考えられる。また、今回の研究では入学直後の孤独感と対処行動有効性評定をもとに対処後の孤独感を算出したため、入学段階の孤独感に対処後の孤独感が影響を受けてしまっていた可能性も考えられる。

大学新生の孤独感を取り扱う今回のような研究の場合、大学入学後すぐにUCLA尺度において孤独感を測定し、その後の対処行動を行う期間を経てから再度UCLAにて孤独感を測ることで、純粋な孤独感の変遷をみることはできないのではないかと感じた。

また、孤独感の性質と対人認知に関して調査した廣岡、徳谷(2003)はUCLAの測定を2度行うことで、単なる被験者間の孤独の高低比較だけでなく、慢性的孤独群と状況的孤独群という孤独の認知特性をも考慮に入れた考察が可能であるとしている。大学新生の孤独感と自己呈示の関連を明らかにすることを目的とした今回の調査においても、それらの孤独感に対する認知特性を考慮することで、より詳細な自己呈示と孤独感の関係を見出すことができるだろう。

次に、孤独の原因と孤独の対処行動に関して感じた課題を挙げる。広沢(2002)では孤独の原因と孤独の対処行動に加え、孤独を感じた際の感情反応を測定し、孤独感と孤独の対処行動のより詳細な区分を行っている。今回の調査にあてはめて考えると、例えば、孤独を感じた際に身近な行動という対処を行った場合、絶望感を感じつつ行う身近な行動と楽観的な考えで行うそれとでは、対処行動の質に違いが表れる可能性が考えられるのである。広沢が検討したように、感情反応の違いを視点に加えた対処行動と対処後孤独感の分析を行うことで、今回明らかに出来なかった、対処行動と対処後孤独感の居住体系との関係も何らかの違いも見出せるのではないかと感じたため併せて以上2点を今後の課題としたい。

【引用文献】

- 安藤清志 (1994), 見せる自分/見せない自分—自己呈示の社会心理学—サイエンス社,
- 廣岡秀一・徳谷智美 (2003), 社会的状況が孤独感および対人認知に及ぼす影響, 三重大学教育学部研究紀要, 第 54 卷
- 広沢俊宗 (2001), 孤独の原因、感情反応、および対処行動に関する研究(Ⅲ), 関西国際大学研究紀要 第 2 号 85~96
- 広沢俊宗 (2002), 孤独の感情、対処行動に及ぼす孤独感、および Aloneness への耐性の影響, 関西国際大学紀要, 第 3 号, 81~96
- 五十嵐祐 (2002), メディアコミュニケーションが心理的健康に与える影響—大学新入生の社会的ネットワークと孤独感を中心として—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究紀要, Vol 50, 323~325
- 工藤力・西川正之 (1983) 孤独感に関する研究(Ⅰ)—孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討— 実験社会心理学研究 第 22 巻, 99~108
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究 Vol, 11 86-98
- 諸井克英 (1987), 大学生における孤独感と自己意識, 実験社会心理学研究 第 26 号, 151~161,
- Peplau, L.A & Perlman, D (1982) Perspective on loneliness, A source book of current theory, research and therapy. 1-18
- Russell, D・Peplau, L,A & Ferguson,M (1978) Developing a measure of loneliness, Journal of Personality Assesment. Vol, 42, 1038~1047
- 齊藤孝 (2005), 孤独のチカラ, PARCO 出版
- 杉谷陽子 (2007), メールはなぜ「話しやすい」のか?: CMC(Computer-Mediated Communication)における自己呈示効力感のお上昇, 社会心理学研究 第 22 巻第 3 号 234~244
- 辻大介 (2006), つながり不安と携帯メール, 関西大学社会学部紀要 第 37 巻第 2 号, 43~52

【謝辞】

この卒業論文を作成するにあたって、ご多忙のなか長期にわたってご指導、ご助言をいただきました三重大学教育学部南学先生に感謝を申し上げたいと思います。なかなか研究は進まない上、ご心配をおかけすることもありましたが、根気強くご指導いただき、本当にありがとうございました。

また、本研究を行うにあたり、質問紙調査依頼に快くご快諾いただいたうえ、貴重な授業の時間を提供してくださった澤田忠幸先生に心より感謝申し上げます。

本研究を行う中で、様々なアドバイスを下さった、中西良文先生、赤木和重先生、松浦均先生をはじめとする学校教育講座の諸先生方、調査に関わる印刷機の使用等でお世話になった事務職員の園田喜子さんに感謝申し上げます。

最後に、一緒にここまで頑張ってきた南ゼミをはじめとする赤木ゼミのみなさん、中西ゼミのみなさん、本当にありがとうございました。共に頑張った時間はきっとこれからも私にとって決して忘れることのできない、素晴らしい財産になると思います。

本論文は、本当に多くの方々のお力添えをいただき完成に至ることができました。この感謝の気持ちを忘れることなく、これからの生活への活力させていただきたいと思います。本当にありがとうございました。

平成 21 年 1 月 20 日

【補足資料】

質問紙

大学新生の孤独感と 携帯メールについての調査

この調査は、大学新生の孤独感と携帯メールについてお聞きするものです。
この調査には正しい答えや望ましい答えといったものはありませんので、あなたの思ったとおり、率直に回答してください。

このアンケートの回答結果はすべて統計的に処理され、個人の回答が問題とされたり、他の人の目に触れたりするようなことは一切ありません。回答者の方に個人的なご迷惑をおかけすることは決してありませんので、お手数とは思いますが、ご協力お願いいたします。

なお、この調査に関してご意見や問題点がございましたら、下記までご連絡ください。

2008年12月

三重大学 教育学部 人間発達科学課程
西 陽平 E-mail [205713@m.mie-u.ac.jp]

性別[男性 女性]

学年[1年・2年・3年・4年]

年齢[歳]

居住体系[下宿・自宅より通学]

1. 大学に入学して間もないときの自分になったつもりで回答してください。
 あなたが大学に入学したとき、次の各質問の内容をどの程度感じていましたか？最も当てはまるものに○をしてください。

	決して感じない	めったに感じない	時々感じる	しばしば感じる
例) 私はダメな人間だと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	③	4
1. 私は自分の周囲の人たちと調子よくいっている・・・	1	2	3	4
2. 私は人とのつきあいがいい・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
3. 私には頼りにできる人がだれもない・・・・・・・・・・	1	2	3	4
4. 私はひとりぼっちではない・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4
5. 私は親しい友達の気心がわかる・・・・・・・・・・	1	2	3	4
6. 私は自分の周囲の人たちと共通点が多い・・・・・・・・	1	2	3	4
7. 私は今、誰とも親しくしていない・・・・・・・・・・	1	2	3	4
8. 私の興味や考えは、私の周囲の人たちとは違う・・・	1	2	3	4
9. 私には親近感の持てる人たちがいる・・・・・・・・・・	1	2	3	4
10. 私は外出好きの人間である・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4

	決して感じない	めったに感じない	時々感じる	しばしば感じる
11. 私は疎外されている	1	2	3	4
12. 私の社会的なつながりはうわべだけのものである . 1		2	3	4
13. 私をよく知っている人はだれもない	1	2	3	4
14. 私は他の人たちから孤立している	1	2	3	4
15. 私はその気になれば、人とつきあうことができる . 1		2	3	4
16. 私をほんとうに理解している人たちがいる	1	2	3	4
17. 私は大変引っ込み思案なのでみじめである	1	2	3	4
18. 私には知人はいるが、気心の知れた人はいない . . 1		2	3	4
19. 私には話し合える人たちがいる	1	2	3	4
20. 私には頼れる人たちがいる	1	2	3	4

2. 大学に入学して間もないときの自分になったつもりで回答してください。
 あなたが大学に入学し間もない頃、寂しいと感じた際についての質問です。その寂しさの原因は以下の質問にどの程度当てはまっていますか？最も当てはまるものに○をしてください。

	全 く そ う 思 わ な い	そ う 思 わ な い	そ う 思 う	非 常 に そ う 思 う
例) 冬は夏より寒いと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3 <input checked="" type="radio"/>	4
1. 自分の事を周りの人たちに 知ってもらおうとしないから・・・・・・・・	1	2	3	4
2. 人からの愛情や信頼が信じられないため・・・・・・・・	1	2	3	4
3. たまたま自分の周りにいる人が 知らない人ばかりだから・・・・・・・・	1	2	3	4
4. 人から拒絶されるのではないかと いう恐れを抱いているため・・・・・・・・	1	2	3	4
5. 周りの人たちの考え方と 自分の考え方が異なっているため・・・・・・・・	1	2	3	4
6. 進学、就職、引越しなどで環境が変化したから・・	1	2	3	4
7. 自分に頼れる人がいないため・・・・・・・・	1	2	3	4
8. 自分が積極的に友達を作ろうとしないから・・・・・・・・	1	2	3	4

	全く そう 思わない	そう 思わない	そう 思う	非常に そう 思う
9. 身近な人との別離があったから	1	2	3	4
10. 周りにいる人たちが自分を 仲間に加えようとしてくれないため	1	2	3	4
11. 自分のそばに誰もいないから	1	2	3	4
12. 自分には友達ができないと思い込んでいるから	1	2	3	4
13. 物事を悲観的に考えすぎているため	1	2	3	4
14. 家庭環境に問題があるため	1	2	3	4
15. 友達を作る機会に恵まれていないため	1	2	3	4
16. 自分自身の性格のため	1	2	3	4
17. 自分を頼りにしてくれる人がいないため	1	2	3	4

3. 大学に入学して間もないときの自分になったつもりで回答してください。

あなたが大学に入学し間もない頃、寂しいと感じた際についての質問です。その寂しさをまぎらわすために以下のことをどの程度行いましたか？最も当てはまると思うものに○をしてください。

	全く 行な わな かつた	あ ま り 行 な わ な かつた	ど ち ら と も 言 え な い	時 々 行 な つた	し ば し ば 行 つた
例) 部屋の掃除をする	1	2	3	④	5
1. 仕事や勉強に打ち込む	1	2	3	4	5
2. カラオケに行く	1	2	3	4	5
3. じっと耐える	1	2	3	4	5
4. 新しくできた友人と遊ぶ	1	2	3	4	5
5. TV ゲームをする	1	2	3	4	5
6. 親にあまえる	1	2	3	4	5
7. 昔からの友人に会う	1	2	3	4	5
8. 酒を飲む	1	2	3	4	5
9. 何か(趣味)に熱中する	1	2	3	4	5

	全く行なわなかった	あまり行なわなかった	どちらとも言えない	時々行なった	しばしば行った
10. 新しい友人とメールをする	1	2	3	4	5
11. 自分を見つめなおす	1	2	3	4	5
12. 楽しいことを考える	1	2	3	4	5
13. 一人で泣く	1	2	3	4	5
14. TV を見る	1	2	3	4	5
15. 昔からの友人にメールをする	1	2	3	4	5
16. 寝る	1	2	3	4	5
17. 昔からの友人に会う	1	2	3	4	5
18. 一人になる	1	2	3	4	5

4. 大学に入学して間もないときの自分になったつもりで回答してください。
 問3を答えた上で以下の質問に回答してください。最も当てはまるものに○をしてください。

	全く当てはまらない	当てはまらない	当てはまる	とても当てはまる
1. 孤独を感じた際に行った対処行動で孤独は癒えた・	1	2	3	4
2. 対処行動を行ってから孤独はぶり返さなかった・	1	2	3	4
3. 私のこれまでの大学生生活は孤独とは無縁だ・	1	2	3	4

5. 大学に入学して間もないときの自分になったつもりで回答してください。

入学直後に大学でできた新しい友人と携帯メールをした際、そのメールを行なう中で以下のことと自分がどれほど当てはまっていますか？最も当てはまるものに○をしてください。

	当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらとも言えない	少し当てはまる	当てはまる
例) 個性的な人間だと思われたい・・・・	1	2	3	④	5
1. できるだけ自分の存在をアピールしたい・	1	2	3	4	5
2. 自分を目立たせるために張り切りたい・	1	2	3	4	5
3. 自分の考えが相手から否定されないか心配だ・	1	2	3	4	5
4. 不愉快な表現をされると 慌てて相手の機嫌をとる・・・・	1	2	3	4	5
5. 一目置かれるために チャンスは有効に使いたい・・・・	1	2	3	4	5
6. まだあまり交友がない人には まず自分の魅力を印象づけようとする・	1	2	3	4	5
7. 自分が孤立していないか不安になる・	1	2	3	4	5

	当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらとも言えない	少し当てはまる	当てはまる
8. 人に文句を言うときも、 相手の反感を買わないように注意する・・・	1	2	3	4	5
9. 相手との関係がまずくなりそうな 議論は出来るだけ避けたい・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
10. 自分が注目されるために つい人の目を引きたくなる・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
11. 高い信頼を得るために 自分の能力は積極的にアピールしたい・・	1	2	3	4	5
12. 目だった行動をして相手に 相手に変な目で見られないか心配だ・・・	1	2	3	4	5
13. 自分の意見が少しでも 批判されるとうろたえてしまう・・・・・・・・	1	2	3	4	5
14. 自分の長所を知ってもらうように張り切る・	1	2	3	4	5
15. これまでの自慢できる経験を伝えることは 相手に自分を印象付けるチャンスだ・・・	1	2	3	4	5

	当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらとも言えない	少し当てはまる	当てはまる
16. 場違いなことを言って笑われないよう いつも心掛けている・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
17. 相手から敵視されないような 人間関係作りにはとても気をつけている・	1	2	3	4	5
18. 皆から注目され愛される有名人に なりたいと思うことがある・・・・・・・・	1	2	3	4	5

質問は以上です。何かお気づきの点があればコメント欄にお書き込みください。
ご協力ありがとうございました。

コメント欄